

12. 長崎平和研修

SGH 長崎平和研修を実施しました

7月25日（水）～7月27日（金）の3日間にわたり、本校SGHの取り組みの「夏季平和三研修」第一弾として、GLコースから8名が参加したSGH長崎平和研修を実施しました。2014年度から広島、長崎、長崎、広島と交互に実施してきましたが、5年目の今年度は再び長崎での平和研修でした。原爆資料館の見学、被爆体験講話、碑めぐりやインタビューなどのフィールドワーク、大学教授による平和講義や現地高校生とのディスカッション交流等を行いました。

本校SGH事業では「貧困の撲滅と災害の防止・対策～世界平和の実現のために～」の課題研究の具体的構想テーマのもと、様々な角度から上記テーマについて学んでいます。本研修は、ともすれば自明と思いがちな日常を振り返り、私たちの諸々の活動は過去の先人たちによる壮絶な労苦によってもたらされていることを



を認識し、まだなお世界を訪れているとは言い難い平和な社会の実現に向けて高校生として何ができるのかを考える研修です。

事前学習では長崎への原爆投下までの歴史的背景をリサーチ・発表し、現在の核兵器の問題についてグループ・ディスカッションをし、さらに立命館大学国際平和ミュージアムを訪問するなどしてきました。歴史の授業などで学習してきたこととはいえ、さらに個別事項について改めて焦点化して学ぶ直すことでもう一段理解が促進されたようでした。グループとして学びを共有し、実際に肌感覚として実地研修することにより、さらにその理解が深まると考えます。

長崎に到着後すぐに原爆資料館に赴き、一人ずつメモを取りながら時間をかけて原爆被害の実相と現在の核を巡る世界の状況の展示などを見学しました。広島を訪れたことはあるが長崎は初めてという生徒たちも多く、資料館での数々の衝撃からは広島のそれとはまた異なる相貌を感じ取ったようでした。見学をしたのちは、



平和公園内の碑や爆心地を巡ったり、追悼記念館で折り鶴を折ったり、思い思いに当時の状況に思いを馳せました。その後、資料館内の平和学習室にて中村一俊様から被爆体験講話をお聴きしました。中村さんは、光陰矢のごとしで最近物忘れがひどいが、こと原爆に関しては鮮明に覚えていると言われ、原爆という言葉は聞きたくも思い出したくもないという思

いで過ごしてこられたということでしたが、今回は原爆投下の時のことをそのままにお伝えしたいと言われ、話を始められました。そこで語られた内容は、この世のものとは思えない地獄絵図で、その惨状について訥々と語る口調がかえって真実の恐ろしさを物語っていました。最後に、若者へのメッセージとして「戦争は人のころにも長い間傷を残す。戦争ほど愚かで残酷なものはない。戦争だけはしてはいけないと思いつけること」を静かな語りでお伝えいただきました。



夜のミーティングでは、この日の活動を振り返り、思いを共有しました。そのなかでも、事前学習で学び自己の見解としてきたことが、今回実際にお話を聴くことで変化し、それは自身の気づきとなったようでした。また、翌日の活動についてグループに分かれてディスカッションをし、思いを一つにしました。



2日目は午前から午後にかけてグループごとに分かれてフィールドワークを実施しました。山里小学校、片足鳥居等、永井隆記念館、浦上天主堂、平和公園等を巡って学習し、また、街ゆく人々にインタビューをおこないました。アメリカ、フランス、ドイツ、イタリア、スイス、カナダ、オランダ、中国、チェコ、スペイン、チリ…。様々な



国から長崎を訪れた方々へのインタビューをおこない、訪問の動機や核に対する複雑な思いを聴き取ることができました。それは、書籍等の情報だけでは得ることの難しい体温を持った言葉の数々でした。その後、それらをミーティングで共有したのち長崎大学を訪問しました。そこで経済学部井田洋子教授から平和についての講義を受け、その後平和をテーマとしてディスカッションを長崎東高校の生徒とともに実施しました。長崎大学へ留学中の留学生も交え、津田教授は平和の定義をヨハン・ガルトウングから説き起こし、**passive peace**

(消極的平和)に焦点を絞って話を進められました。人類の歴史を戦争の観点から振り返り、18世紀後半に現れることになった **human rights** (人権)とそれに伴う国家観の確立、そしてその後の変遷を概観し、私たちが戦争をなくすためにはどうすれば良いかと投げかけられました。戦争は人為的要因によって発生するものだから、人間の意



思ないし意志で回避できるはずのもの。なにより、武力紛争が発生する要因を除去することが肝要で、武器をなくすことが戦争をなくす最も良い方法だとのお話をきっかけに、グループ・ディスカッションが始まりました。同じ言葉でも、それによどのような意味に込めているのかが人により異なるので言葉の定義は大切で、ディスカッションの際には尚更そう。だから、言葉の先にあるその実態を見つめることを強調されました。

限られた時間のなか、生徒たちは時間を惜しむようにディスカッションをしたのち、その内容を発表し合い意見を共有しました。それぞれがこの時間で得た気づきを表明し、また共感することも多々あったようでした。もっと議論をしたいという想いに後ろ髪をひかれながら、長崎大学をあとにしました。井田先生、長崎東高校の皆さんありがとうございました。

生徒たちは平和について学べば学ぶほどその問題の複雑さに当惑し、それを軽々しく語ることへのためらいにより、しばしば身体をこわばらせる場面を惹起させたようでした。事前学習で学んだ考えが長崎に来て変わることへの驚きと困惑。しかし、そこから自己の意見を立ち上げ、それをどのような形であれアウトプットしようとすることの大切さを学んだようでした。

3日目は、この日までに赴くことのできなかつた場所を思いおもい訪れ、帰京の途につきました。

本研修では世界平和の実現のための諸相を学ぶことはもちろんでしたが、生徒たちの日常の諸活動がどのように他者と、世界とリンクしているのかを意識させながら、自己省察に重点を置いて展開しました。ともすればマジックワードになりがちな「グローバル」という言葉のもつ内実、英語に特化される学習がもたらすことの本質的な意味、社会的弱者をはじめとするマイノリティへのまなざしのありかたなど。これらを研修活動と関連させながら学んでいくことが生徒たちの思考を重層的にさせていくと信じ、今後も SGH 諸活動を実推進していきたいと考えています。

